

“わたしのまち”

足立区

足立は美と知性の宝庫だった

文人たちが集い 作品を残したまち

江戸時代から交通の要としてにぎわっていた千住を中心に、足立の人々と絵師たちの間には親しい交流がありました。当時の足立の人々は生活の中に美術作品を取り入れ、教養豊かな文化的な暮らしを送っていました。この春、郷土博物館に当時の様子を知ることができる貴重な作品が展示されます。



足立は美術品の宝庫だった

四方を川に囲まれ、区立公園の面積は23区最大という水とみどり豊かな足立区。江戸時代には、川には舟が浮かび、千住を中心に人々が行き交い、大変にぎわっていました。

千住は松尾芭蕉「奥の細道」の旅立ちの地としても知られ、古くから俳諧の文化が根付いた土地でした。俳諧は広い階層の人々の間で親しまれ、足立の人と江戸の文人や絵師たちとの交流も深まっていました。

ここ数年足立区では、そうした絵師たちによる美術品の数々が見つかっています。精神的に豊かな文化・暮らしは、江戸時代で終わらず昭和にまで続いてきたことが明らかになりつつ

郷土博物館では、古くて新しい足立区の魅力を知ることができる!



あります。

続々と発見される美術資料

歌川広重や葛飾北斎の作品をはじめ1300点もの浮世絵コレクションを誇る郷土博物館は、平成21年、江戸時代から昭和までの「江戸東京の東郊」をテーマに、足立区の発展の歴史を知ることのできる場としてリニューアルオープンしました。

「千住の琳派展」や「大千住展」といった千住に伝わる歴史美術資料を紹介する展覧会が開催されると、「うちにも同じような資料がある」という情報が区内各地から多く寄せられるようになりました。

館内には、昔懐かしいおもちゃや生活道具類の展示もある。実際に手で触れることができ、子どもたちよりもむしろ大人のほうが夢中になっている姿も見かけられる



区立郷土博物館での文化遺産調査の様子。区内には地域の生活に密着した資料が多く残されていることが明らかになった

それを受けて、足立区では区制80周年事業の一環として文化遺産調査を実施しました。

その結果、江戸絵画を中心とした美術品や関連資料が確認されました。建物の解体前日に情報提供があり、大慌てで現地へ向かい、その場で寄贈されるなど突然の調査もありました。いずれにしても家庭の中で大切に保管・使用されてきたものであり、地域の方々との信頼関係なくしては調査は進みませんでした。

こうした調査を通して、千住だけでなく区内のほかの地域でも、俳諧や絵画など文雅を楽しむ当時の様子が明らかになってきました。

絵師を支えた足立の人々

千住宿は、日光街道の江戸を出て最初の宿場町であり、仙台の伊達家や秋田の佐竹家など東北や関東から江戸に向かう大名行列や、多くの旅人が行き交う場所でした。

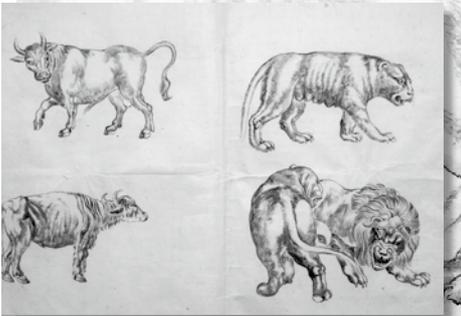
また、当時の足立区周辺の河川に囲まれた穏やかな風景や自然は、都市に住む人々の好む行楽地で、江戸の人々が徒歩や船で遊びに出かける場所として人気を博しました。

東郊一の規模を誇る千住青物市場(やつちや場)は、神田、駒込と並ぶ江戸三大青物市場の一つに数えられ、街道沿いには多くの商店が建ち並び、大変にぎわっていました。

幕末から明治にかけての千住では、地域の有力者たちが作品を発注することで画家の活動を支援し、多数の文人や絵師が活躍するなど、華やかさに満ちていました。

経済的に豊かな商家の旦那衆は、数々の美術品を収集し、日々の暮らしに彩を与えました。季節に合わせた掛け軸を床の間に掛け、年中行事や冠婚葬祭などの折には屏風を飾りました。絵師たちは初節句を祝うための雛人形

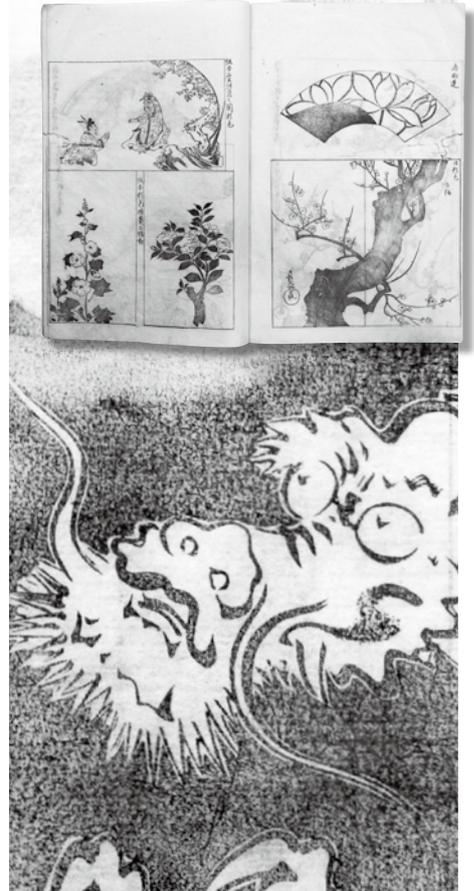
谷文晁「西蛮画獣譜写」



鈴木其一「歌仙図」



酒井抱一「光琳百図」



見て楽しい遊んで楽しい、会話が弾む 郷土博物館の人気常設展示

今年11月で開館30年を迎える 足立区立郷土博物館

足立区大谷田5-20-1 【交通】 JR亀有駅北口より東武バス「足立郷土博物館」下車徒歩1分、「東淵江庭園」下車徒歩4分、JR・東京メトロ千代田線綾瀬駅西口より東武バス「東淵江庭園」下車徒歩4分、駐車場有り 【休館日】 月曜日（月曜日が祝日の場合はその翌日）、年末年始 【開館時間】 9：00～17：00（入館は16：30まで） 【入館料】 一般200円（高校生以上）※70歳以上は無料



お化け煙突

千住火力発電所 1/200復元模型

大正15年～昭和39年、足立区にそびえていた千住火力発電所の四本煙突。見る角度によって本数が違って見えることから「お化け煙突」と呼ばれ、東京タワーができるまでは都内で1番の高さともいわれていた。東京電力に博物館の職員が通い、調査し正確に再現してある。



昔の家を再現

木造都営住宅の復元模型

高度成長期に多く建てられた平屋建ての1軒2世帯の棟制長屋。昭和35年に建てられてから築4年後の夏の日の夕方5時ごろ、両親と小学生の子ども2人の家庭をイメージして作ったとのこと。まるで、「ご飯できたわよ～」とお母さんが子どもを呼ぶ声が聞こえてきそう。



昭和40年代頃まではあちこちで見られた

こえだ 肥溜めの原寸復元

かつての足立区では米や野菜が作られ、江戸東京の人々の食を支えていた。東郊の農村には堆肥をつくるための草を採る森などがなく、代わりに肥料として都市から出される下肥を豊富に使うことができた。このため、当時の足立は平坦な耕地が一面に広がる風景だった。当時を知る人にとっては懐かしい展示かも!?



四季折々の草花が楽しめる

東淵江庭園

隣接する東淵江庭園は故 小形研三氏が設計した野趣あふれる回遊式日本庭園。梅、桜、藤棚など季節の変化に癒されます。



を描いた作品を依頼されることもあり
ました。

絵師 船津文洌

郷土博物館による文化遺産調査の結果、千住から離れた農村地帯でも、江戸文化との交流を示す資料が発見されています。

江戸後期沼田村(足立区江北)の名主で自身も絵師であった船津文洌が所蔵していた絵や版本など1000点以上を同家の子孫が保管していることが明らかになったからです。文洌は江戸時代

の絵師、谷文晁の弟子です。江戸琳派の祖である酒井抱一の弟子、鈴木其一とも交流がありました。発見された

中には美術史上貴重なものも多く、酒井抱一の「光琳百図」は、1815年に尾形光琳の百回忌に際して酒井抱一が編纂した光琳の画集です。何点か現存していますが、抱一の朱文、押印がある貴重な資料です。

また、「西蛮画獣譜写」は、文洌の師匠、谷文晁が医学者ヨンストンが描いた動物図鑑を写したものとされています。3月13日から5月22日まで開催され

る「文化遺産調査特別展 美と知性の宝庫 足立」では、この文洌の資料を中心に見ることが出来ます。

数々の美術資料は絵師ゆかりの家から見つかっています。その中には日記や注文簿なども含まれており、当時の絵師の暮らしぶりや絵師と足立の人々との強い結び付きなどが推察できます。展示される作品からは、毎

日の暮らしの中で美に親しむ当時の人々の、教養豊かな様子を垣間見ることが出来ます。芸術の香り高い、活気あふれる当時の足立の

3月13日から5月22日まで開催される、文化遺産調査の成果による船津家所蔵の美術資料展。書画をたしなみ生活に取り入れていた教養人が多数足立に居住し、江戸の絵師を含めて互いに交流していた当時の様子を知ることができる。期間中は常設展示は行わず、全館を通して展示される

暮らしに思いを馳せ、郷土博物館で豊かなひとときを過ごしてみませんか。

